

日語文學叢刊之一

漢文
譯註

狂人日記

狂人日記

某君兄弟のことについては、今は知る人もありませんが、

皆僕の中學時代の親友なのです。

この兄弟の一人が、此の間大病をして居るといふことをフ
ト耳ニにしたので、歸省した序ニに、迂四り道をして訪ねて見まし
た。

で會えたのは兄さんの方で、患つてるたといふのは、弟の
方だつたのです。

註 (1)フト―偶然。(2)耳にした―聽到。(3)序に―順便。(4)迂り道

―繞道；迂道。



『わざ、遠いところを御見舞下さつてどうも有難う、お蔭で弟の病氣もスツカリ癒つて、今は仕官の爲めに某地に行つてゐますよ』と笑ひ乍ら、其の弟といふ人の、病中に認め置いていたといふ日記を見せてくれました。

『これで見ると當時の病狀がよく分るから、舊友諸君に呈上しても差支えありません』……といふ次第で、私はそれを持ち帰り、一通り目を通して見ました。

その病氣といふのは——脅迫觀念に惱まされる——一種の『迫害狂』とでもいふ可きものであつたらしく、日記に書かれてゐる言葉も、眞に亂雑で、順序もなく、取りとめもない言葉が頗る多いのです。

又日記とは言つても月日も書いてなく、墨色字體も一樣でないところから見ると、一時に書き上げたものではないといふことが分るのです。

然し、中には、略々カまとまりのついた所も有つて仲仲興味があるもので、今其の中の一編を採録して、醫家諸君の研究に供したいと思ふのです。

日記中に散在する言葉の間違+や、語調などは其の儘一字も改めないことにしましたが、唯、人名は村の人達の名前では

註 (1) 御見舞下さつて—承感問。(2) お蔭で—托福。(3) スツカリ—完全。(4) 認めて—寫。(5) 差支へありません—不妨。(6) 次第—緣故。(7) 一通り—一遍。(8) 取りとめもない—沒有結束。(9) まとまり—聯絡。(10) 間違—錯誤。

あるし、（尤も世間では此の村の八達の名前を知つてゐる人も居まいだらうし、發表しても差支は無いものゝ）やはり實名を避けて委く假名を用ひることにしました。

日記の書名は、本人が病氣快復後に、特に題して置いたものですから、別に改めないで其の儘にして置きました。

—— 中華民國七年七月二日識す ——

【一】

今夜は實にいゝ月だ……。

俺が彼奴と逢ないことも、もうかれこれ三十餘年になる。

……然かも今日はとう／＼逢ふことが出來た。

……で實に氣持がいゝ……愉快だ。

今になつて、ヤツト氣付いたことだが、俺が過去三十餘年の年月といふものは、餘りにもボヤケて暮して居たものだから……。

だが、これからは充分氣をつけなくちやならんぞ。

そうでなけれあ、趙の處の犬が、なんで、あゝして俺の眼をジロ、と見るものか……俺がかうして、何かと氣苦勞するものも、決して無理は無いらんだ。

註 (1)尤も—雖則。(2)ヤツト—纔。(3)付いた—注意；覺到。(4)ボ

ヤケて—發昏。(5)暮して—過活；度日。(6)ジロ、と—多疑。(7)

氣苦勞する—勞神；費心。

【二】

今日は全く月が無い……これあ唯事ぢやない……。

充分用心して門を出た……趙貴翁の眼の色がどうも怪しい

……此の俺を恐れてゐる様だ……。

俺をどうかしようと思つたゐる様だ……まだ外にも七八人

居て、ゴソ／＼と俺の事を談じてゐるらしい。

あいつ共は俺に見られることを恐れてゐる様だ。

往來の奴共も又御同様だ……。

其中で一番凄^がい奴が、俺を見て、大口開けてアハツハハと

笑ひやがつた——。

俺は其の笑ひ聲を聞いた時、頭^カから爪先^スまで思はず^ズゾツと
した――。

俺はスツカリ分つた、奴等^カの手配はもうチャンと出来上つ
てゐるんだ……

だが俺は恐れはしなかつた、俺は平常通り⁺ドハハ⁺歩いて
行つた。

……と前方に一羣の子供が居た……。

註 (1) 唯事―平常小事。(2) 用心して―小心謹慎。(3) コソコソと―竊

竊。(4) あいつ共―他們。(5) 往來―路上。(6) 凄⁺い奴―兇漢。(7) 頭

から爪先まで―從頭⁺到脚。(8) ズツとした―戰慄。(9) 手配―布置。(10)

どんく―迅速有力。

此奴等も俺の事を話してゐるらしい——。

眼の色も趙貴翁と同様だ……その顔色と來たらマルデ眞蒼た。

俺は熟々考へてみたんだが、俺と、あの子供等との間に何の恨み讎があるろう……にも拘らず奴等の態度ときたらあの通りだ。

俺は我慢が出来なくなつたから、大聲で呶鳴つてやつた

『理由を言へ——理由を……』と。

すると、奴等は驚いてドント\逃げて行つた。

俺は考へるが……俺と趙貴翁との間には、いつたい何の恨があるんだ……。

又往來の連中と俺の間に何の恨みがあるんだ……。

只こんな事はあつた——二十年ばかり以前に、古久さんの古帳簿を俺ガグ、シャトゝに踏みつけたことがあつた。

その時、古久さんは大變氣を悪くしてゐなすつたが……さうだ、趙貴翁は古久さんと面識はないか、きつと其の噂でも聞き込んで、古久さんに代つて不平を抱ひてゐるんたらう——。

そして往來の連中と手を組んで俺に何とかしようとしてゐ

註 (1) マルデー完全。(2) 我慢—忍耐。(3) うつたひ(一體)—到底。

(4) 連中—一夥人。(5) 古賬簿—陳年賬簿。(6) 氣を悪くして—不高興

(7) 噂—風聲；謠傳。(8) と手を組んで—結識；勾結。

るに違いないんだ。

それにしても、いつたい子供達は……小供達はとうしたといふんだ……古久老人時代には、あの小供達ちは、まだ牛れてはゐなかつた筈だ……

いつたいどういふ理由で今日もあゝした變な眼つきで俺を見たんだらう……。

如何にも此の俺を恐れてゐるらしい……。

それが俺にとつては、反つて氣味が悪い……。

俺はそれを思ふと實に心苦るしい、遺瀨ユゼないんだ……。

さうだ——わかつた、……これあきつと、あいつ等の母親達が教へ込んだナ……。

【三】

夜^五どうしても眠れない。

萬事、よく／＼研究してかゝらにあならん、そこで始めて何もかも明かになるといふもんだ。

あいつ等——そうだ、あいつ等の中には、知事に處刑されて、二三百歐られた奴もあるし、役人に妻君を寢取られた奴もある、又母親が金貸^五に責め殺された奴さへある、……だが

註 (1) 氣味が悪い——不快活。(2) 遣瀨ない——無聊。(3) どうし——無論如

何。(4) かからにあならん——須要。(5) 金貸——借主。

、そうした目に逢つた時の奴等の顔色でさへも、昨日俺を見た時の様な凄味はなかつた。

一番不思議なのは、昨日街で見たアノ女だ……。

自分の子供を叩き乍ら、『此の餓鬼メ嚙み殺してもしたら氣がサバ／＼するだろう』と言ひ乍ら、ジロリと俺の方を見た。

俺はハツとして、思はず聲を立てた。

すると居合せた例の青猿共がドツト笑ひやがつた。

そこへ陳老五が出て来て、俺を無理に家の中へ引張つて行つた。

俺を家の中へ引張つて行つたが家の奴共は、皆俺を見て知

らぬふりをしてゐる……

奴等の眼の色も、外の奴等と全く同じだ。

俺が書齋に入るとすく、外からがチャンと錠を下ろして仕舞つた。

マルデ、鶏でも閉めこんだ様なもんだ……。

かうした奴等の振舞を考へると、益々分らなくなる。



註 (1) そうした目—這樣情形。(2) 嗚味—兇惡；可怕。(3) 叩き打。

(4) サバ／＼する—爽快。(5) シロリと—急視。(6) ハツとして—吃下

一驚。(7) 青猿共—猙獰惡徒。(8) 無理に—硬；亂；強。(9) 引張つて

—拉；拖。(10) ガチャンと—鏗然。(11) 錠—鎖。(12) 振舞—行爲舉動。

四五日前だつた、狼子村の小作人が、不^二作の事で相談に來た時、俺の兄さんに話してゐた事を聞いたんだが……何でもその小作人共の村の、或る悪るい奴が……皆に叩き殺ろされたさうだ……。

する又その中の幾人かが、その殺された奴の生^三膽を引出して、それを油で炒つて食べたといふんだ。

それは、人の膽を食べると、自分達の膽^四玉も強くなると言ふんで……そいつ等が早速これをやつたんださうだ。

俺は其の時、傍でこの話を聞ひてゐたんだが、話の合ひ間に一寸文句を入れてやつた、

すると其の小作人と兄貴がヂ^五ロリと、俺の方を見やかつた

成程……今日始めて分つたことだが……其の時の奴等の眼つきは、外のアノ一味の連中のと全く同じなんだ……。

それが今日ヤツトわかつたんだ。

今もその時の目つきを思ひ出すと、頭から爪先迄ゾツとす
る……。

奴等は確に人間を食つてる……だから此の俺をだつて食は
ないとは限らん。

さう云えば、いつぞや街で、あの女が『食つて了つたら』云

註 (1)小作人―佃戸。(2)不作―歉收。年荒。(3)生膽―心肝。(4)膽
玉―膽力。(5)目つき―眼光。眼色。(6)だつて―就。(7)いつぞや―
那時(不確定語氣)。

々と言つてゐた文句と、そして、例の青猿共の笑ひ方と、又昨日小作人どもが話してゐた話と、そんなこんなを思ひ合せると萬事^二、ツ、タリと符合してゐる。

俺は今もう何もかもスツカリ^一わかつた、あいつ共の話たるや、悉く恐る可き憎悪に充ち、その笑ひの中には、又恐る可き劍^二を藏してるといふこと、又あいつ共の眞白^三に並んでゐる齒、それこそ人間を食ふ牙だ、といふことが今はスツカリわかつた。

○ ○ ○

俺は自分で自分を考へて見て、決して悪人ぢやないと思ふんだが、然し只古久さんの帳簿を踏みつけた事があるものだ

から、この爲に、悪人にされてゐのかもわからぬ。

○ ○ ○

奴等には別に何んだか企めみが有るらしい、が俺にはまだどうもよく分らぬ。

○ ○ ○

奴等は一寸でも自分の感情を害されると、すぐ『あいつは悪る者だ』と言ふ。

俺は今でも、まだよく覚えてゐるが——それは兄貴が俺に作文を教える時だつた……

註 (1)ピツタリと——全然(相合)。(2)劍を藏して——藏着劍。(3)眞白——

雪白。(4)企み——企圖；計劃。

例へば、俺がどんな正しい人に對してでも、一口二口、何處か攻撃的文句を入れて置くと、兄貴は大變喜んで、すぐ二重丸をつけてくれたものだ。

又、斷じて許るすことの出來ぬやうな悪人に對してでも、二三句辯護的文句を挿んで置くと、兄貴は大喜びで、『これあ、素晴らしい出來榮えだ、平凡でない、非凡な腕前を持つて居る——』など、賞め上げたものだ。

萬事が此の調子なんだから、どうしてあいつ等の氣持が疑はずに居れやう……

作文の上ですらこの調子だとすると、ほんとに人間を食ひたがつてゐる時など、どんな事をするかわかつたもんぢやな

い。

マ―萬事研究しなければならん。

そうした上で、始めて明かになるといふものだ……。

エ―と……人間は昔から人を食つてゐたといふ事を、記憶はしてゐるが、然し、それもハツキリしてゐるワケぢやない。

で歴史本を開いて一通り調べて見ると、別段年代は書いて無いが、頁毎に必ず『仁義道德』の五六字がよがめて書いてある。

註 (1)二重丸―雙圈兒。(2)素晴らし―出色。(3)腕前―技倆；能幹

僕は寢ようと思つて横になつてみたが、眠れない、それで
頁を繰つて仔細に目を通してゐると、ヤツと字並みの間から
見出した……

イヤア……書いてあるとも、紙中べツタリと『人間を食ふ』
といふ字が書いてある。

書物にさへ之れ程書いてあるし、又小作人どももあんなに
ペラ、\その事を話してゐたし、それに、其の時奴等共はニ
ヤ、\と笑ひ乍ら、變を眼つきで俺の方を見て居た。

さうだ、俺も人間だ、奴等はきつと俺を食はうとしてゐる
んだ。

【四】

早朝——俺は暫く靜かに座つて居た、そこへ陳老五が飯を持つて來た。

一碗の野菜と、一皿の蒸魚だ……。

この魚の眼は白く硬張^五つて口を開けてゐる、丁度あの人食^六兵とソツクリだ。

註 (1)頁を繰つ—翻書頁。(2)字並みの間—字裏行間。(3)ベツタリと

—密密的。(4)ベラ／＼—滔滔的。(5)硬張つて—突硬。(6)ソツクリ

—一色一様

三口四口、食べてみたが、馬鹿にツル／＼して、魚だが、人間だかわからぬ、で俺はスツカリ吐き出して仕舞つた。

『オイ老五！兄貴に取り次いでくれ……俺は氣持が悪くて仕様が無いから、一寸庭先へ出たいんだと』

老五は何も答えないで黙つて出て行つた。暫くすると又やつて來て門を開けてくれた。

○ ○ ○

俺はジツと動かないで、奴等がどんたす注で、俺をカタつけるかを見ることにする……どうせ奴等は俺を此の儘ぢや濟まさないだらう……。

果して兄貴が一人の爺を引張つて來た。

ユツクリ／＼とやつて来る。

奴の眼の凄さよ……だが向ふも俺を見てハツとしたらしい

が、すぐと頭を下げて、眼鏡の横のところからコツソリと、俺を見てゐる。

兄貴が言ふには『お前は今日は気分が好さそうだな』
で、俺は言つた、『さうだよ』……と、

又兄貴が言つた、『今日は何先生を御連れして来た、お前

註 (1)馬鹿に—非常。(2)ズル／＼して—滑溜溜。(3)取り次いで—傳

話；告訴。(4)カタつけろ 處置。(5)濟まさない—不會放鬆。(6)ユ

ツクリ／＼と—慢慢的。(7)コツソリと—暗暗的。

を診察して戴くんだ』と、

で俺は『ウン』と答へはしたが、どうして／＼、此爺が首斬役人の化_二けてる奴だといふことを知らいで居るものか。

此奴は俺の脈を見るのに事_三寄せて、俺が肥えてるか痩せてるかを探ぐり出さうとしてゐるのだ……といふ事は火を見るより明らかなことだ。

奴は俺の體を検査した手柄_四で以て、一片の肉を分けて貰つて食はふといふんだ。

だが、俺は決して恐れはしないぞ、俺は人こそ食ひはしないが、膽力は奴等よりグツと据_六つてゐるつもりなんだ。

で俺は兩手を突き出して、此の老耆れの偽醫者めがどうす

るかを、ジツと見てゐた。

爺は坐つて、眼を閉じて……暫く撫でたり、さすつたり、考えこんだり、頭をひねつたりしてゐたが、やがて眼を開いて言つた……

『あんたはネ、餘りイロ／＼考へ事をしちあいけませんせ、暫く安靜にして静養しなさい、さうすると好くなります、

(25)

註 (1)首斬役人―劊子手。(2)化けて―扮；喬装。(3)事寄せて―假冒

；托故。(4)手柄―功名・勳績。(5)グツと―遠；更。(6)据つて―放

；置。(7)さすつたり―撫摩。(8)頭をひねつたり―歪轉了頭。(9)や

がて―不久。

(色々考へるな)と、?

(静養をしろ)と、?

フフン成程ネ、俺が肥える様に静養させる、俺が太つてくれれば、結局奴等の食ひ分が多くならうといふもんだナ……

だが癒つたところで、俺にとつて何の利益があるといふんだ、否サ、土臺^ニどうして癒れるものかネ……。

○ ○ ○

奴等^ニの一味は人間を食ひたがつてゐるんだが、さすがに大^ニびらには出来かねる。

で、コツソリとやる爲に、其の手段を祕密にしてゐるらしい。

「マゝ然し大體直接手を下さないでやらうといふ所に術があるらしい……。」

然し、考へればそれも實に笑止の至りさ。

とうとう、俺は我慢が出来なくなつたから、一つ大聲を出して笑つてやつた、するとグツト流飲が下つてバカに氣持が愉快になつた。

俺は俺の此の笑ひの中に、勇氣と正氣が充ち／＼てゐることを自信してゐる。

だが待てよ……俺に勇氣が有れば、奴等は益々食ひたいと

註 (1) フン成程——不錯。(2) 土臺——究竟；全然。(3) 一味——夥人。

(4) 大びらに——公然。(5) 笑止——可笑的。(6) 流飲が下つて——痛快極了。

思ふだらう、といふのは、此度は俺の此の膽を貰らいたいと思ふだらうからナ……。

○ ○ ○

老耆醫者も門から出て行つたが、餘り遠く行かないうちに、低い聲で俺の兄貴に

『早く食べて了はう』と話しかけてゐた、然かも其の時俺の兄貴はうなづいてゐたんだ。

さては兄貴、貴様もいよ／＼俺を狙つてゐるナ……。

兄貴が俺を食はうとしてゐる、この一大發見は意外な事の様でもあるが、然し俺としては前々から大體預想してゐたことなんだ。

○ ○ ○
俺を食べようとする仲間と、一緒に組んでゐるのが、現在眞實の俺の兄貴なんだ。

人食ひこそは現在の俺の兄貴なんだ。

然かも俺はその人食ひの弟なんだ。

俺はどうせ食はれて仕舞ふが、それでも矢張人食ひ兄貴の弟なんだ……、

【五】

註 (1)うなづいて―點頭。(2)仲間―夥伴；伴侶。(3)一緒に組んで―

合在一起。(4)どうせ―無論怎樣。

此の四五日靜かに考へて見た……。

假りに、あの老爺を首切り役人の化けたものではなく、眞個の醫者であるとしても、やはり人間を食ふことには變りあるまい。

奴等醫者共の祖師であるところの李時珍が著した『本草何』とか言ふ本の上にも、明らかに人肉は煎つて食ふことが出来るといふことが書いてある……。

これでもあいつ共は自分達は人など食ひはしないと云えるか。

俺の兄貴に至つては、無理に難癖つけるワケぢやないが……
（僕に書物を講義した時、『易子而食』とハツキリ言つたこ

とがあつた。

又何日だつたか、兄貴と或る餘り好からね奴に就いて議論を始めたことがあつたが、其時兄貴が言ふには『それは當然殺さねあならねばかりでなく、寧ろ（其の肉を食らひ、其皮に寝ねる）に當る奴だ』、とさへ言つたことがあつた。

俺は其頃はまだ子供だつたから、兄貴は恐しい事を言ふ人だと、暫くは胸がドキ／＼して止らなかつた事を思ひ出す。

此の間、狼子村の小作人が來て、肝を食へる話をしてゐた時も、兄貴はそれを別段變にも思はないと見えて、頻りに點

註（1）難癖つける―尋隙。（2）ドキ／＼して―心發跳。（3）別段―特別。

頭いひて居つた。これで見ても兄貴が今の恐ろしい氣持は元々昔からのもので、何も今に始つたものぢやあないといふことが分る。

どうせ『自分の子を他に易へてさへ食ふ』事が出来るんだとすれあ、何二にだつて名目を易えることも出来様し、又誰れだつて構はずに食へることだろう。

今迄は別に何の氣もなく、兄貴の理窟三を聞ひてゐたんだが、馬鹿々々しいことであつたと思ふ。

今にして思へ——兄貴が説法をする時、何だかその口の邊に、食つた人間の脂四をヌいラいつかせてゐたやうでもあつた。イヤそれ かりぢやない、腹の中ぢや此の俺を食つてやら

うと心組してゐたらしいんだ。

【六】

眞暗闇だ、晝とも夜とも分らぬ……。

お……趙家の犬が又吼え始めた。

獅子にも似たる凶悪の心。

兎羊の怯弱——

然して、

狐狸の狡猾——

註 (1)元々—原來；一向。(2)何になつて—無論什麼。(3)理窟—道理。(4)ヌラつかせて—潤着油。(5)心組して—打算、計算。(6)眞

暗闇—漆黒；墨黒。

【七】

俺は奴等の手段を知つた……直接に殺す事は拙い、又出来もしない、又祟があつても困る。

そこで奴等は皆連絡を取つて、チャンと陥穽をつくつて、謂はば俺に自殺をさせ様といふ仕組なんだ。

四五日前町で見た男や女子どもの様子と、此の四五日來の兄貴の素振とをしてみると、八九分通りは見當がつく。

マー 奴等として一番理想的な殺し方と思つてゐるのは、俺が自分で帶を解ひて、それを梁に引掛けて、首縊りをやつて死なせることなんだ……。

これであれば第一奴等は殺人の罪名を負はなくてもすむ、

それでゐて奴等の心願は充分達することか出来るといふもんだ。

かうなつたら奴さん達ちは嬉れしくて堪らず、いひひいひいと笑ひこけることぢやろうよ。

これで不可なけれあ、まだ外に術がある、俺をびつくりさせたり、悲觀させたりしてジワ、くと自然に弱り死をさせるといふ術なんだ。

註 (1) 拙い―拙劣；不對。(2) 祟―禍祟。(3) 仕組―着想；排演。

(4) 素振―態度。(5) 見當がつく―看對；猜中；悟出。(6) 首縊り―上

吊。(7) すむ―安然過去。(8) かうなつたら―這樣一來。(9) 笑ひ

こけり―大笑。(10) ジワ、くと―漸漸。

だが、此の方法は少々俺が衰弱して、瘦せて肉も落ち、味も失せるかしらんが、マ―それでも食べぬよりはましといふもんだらう。

○ ○ ○

奴等は死肉だけ食べる、――さう云へば何かの書物にも書いてあつたのを覚えてゐる、何でも『海乙那』といふ奴が居るさうだが、此奴の眼つき^二恰好ときたら、とても凄いさうた……いつも死肉を喰べ、一番大きな骨でも呑み込んで了ふといふ怪物で、考へただけでも恐ろしい奴なんだ。

何でも此の『海乙那』は狼の親類とかいふが、抑も狼なるものは犬の本家なんだ、とすると此の間、趙の處の犬が俺を

ヂロリ、ヂロリと見てゐたが……さうだ奴も一味の仲間だつ
たんだナ……

で、モ一とつくに打合せが出来てると見えるんだ、あの時
老蒼奴はそしらぬふりをして、地べたを見て居たが……だが
、どうして、此の俺を旨々と瞞すことが出来るものか。

それにしても一番可哀さうなのは俺の兄貴さ、兄貴だつて
人間ぢやないか、それにどうして人殺しがちつとも恐くない

註 (1) 食べぬよりはまし―比沒有吃總要好一點。(2) 恰好―様子；形状

。(3) 一味―黨人；一路人。(4) とつくに―早已。(5) 打合せ―接洽；

同謀。(6) そしらぬふり―不知的樣子。(7) 地べた―地下。(8) 可哀

さうな―可憐。(9) ちつとも―一點都。

のか。

然も現在自分の弟を喰ふ仲間に入つてゐるとは……いつた
いどうしたといふんだ。

今迄ズ！ツと慣れきつて了つて、自分の行ひが間違つてゐ
るとも思はないのか？

それとも、もう 心を失つてしまつたのか、それとも故意
に此の大罪を犯してゐるのか？俺は人間を食ふ奴共を呪詛す
る、……そんなに人が食ひたければ先づ、已れ達から始末し
てかゝれ。

俺は人間を食ふ奴共に勸告する――

先づ已れ自身の身に手を下せと。

【八】

其實斯うした道理は、現在ではあいつ共も篤篤に分つて居る可き筈なんだ……。

突然一人の男がやつて來た……年は二十になつたか、ならぬ位、容貌は餘り好い方でもないが、ニコ、\し乍ら俺がに挨拶した。

こいつの笑ひ方も、どうもほんとうの笑ひ方ぢやなさそうだ、

で俺はそいつに尋ねた、

註 (1)ズーッと一直(従前)。(2)慣れきつて一習慣。(3)始末して一處

理。(4)篤に一早已。(5)ニコ、\一笑顔。(6)挨拶した一應酬；招呼。

『才、人間を食ふといふことは正しい事か?』然し彼奴は矢張り笑ひ乍ら、

『今は何も饑饉年ぢや御座居ませんし、なんで人なんか食べませうよ』と言つた。

で、僕はすく……こいつも同じ仲間だ、人間を食ひたがつてゐる奴だと、いふ事が分つた。

そこで益々勇氣百倍、故意に押し強く聽いてみた。

『エ……いゝのか?』

『そんな事はマア、どうでもいゝぢや御座居ませんか、貴郎はほんとに御冗談ばかり、……へへ……時に今日はほんとに好いお天氣でございますネ、』

『天氣もいゝサ……月も素的だよ……』

だが俺は君に聴くがね、

『オイ、正しいのか？』するとそいつはキツバリとさうでな
いとも言はない、何だか口の中でモグ^五 と答えた、

『エ……それは悪るウ……』

『悪るい？ちや何故、あいつ等は現に食つてるんだ？』

『そんな事ア有りませんネ……』

『そんな事はない？狼子村で現に食つてるぢやないか……』

又書物の上にもチャンと書いてある』

註 (1)押し強く聴いて—強問。(2)御冗談ばかり—專説笑話。(3)素

的—非常好。(4)キツバリと—明白。(5)モグくと—含糊。

その男の顔色がサツト變つた、蒼白になつた。そしてカツト眼を見開ひて、

『それア有ることは御座居ませうよ、そんなことも今迄はさうで御座居ましたらうよ……』

『今迄は、さうで御座居ましたらう！ぢや正しいんだね……人を食つてもよいんだね……』

『私は貴郎とこんなお話は御免蒙りたいです、マーこんな考へは御止しになつたがいゝでせう、かれこれ言ふ可き事柄でも御座居ませんからネ、お話は皆あなたの方が間違つて居りますよ』。そこで俺はいきなり跳び上つた……そしてカツと眼を見開ひた——だがその時はモ—此の男は其の邊には居

なかつた。

奴の年は、俺の兄貴よりズツト若いんだが、それでゐてどうして奴等の仲間になんか這入つてゐるんたらう……。

これアきつと、奴の母親が教へ込んだものだらう……。

だとすれア恐らくはもう奴の子供にも教へてゐることたらう、だからこそ、子供達迄、皆憎らしい眼で俺を見るんだ。

【九】

奴等は自分が人間を食ひたいと思つてゐるくせに、又外の奴

註 (1) サット―突然。(2) カット―陡然。(3) 御免蒙り―請原諒；作罷

論。(4) 事柄―事情。(5) いきなり―忽然。(6) ズツト―更；差違。

(7) くせに―不揃

に自分が食はれはしないかとビク／＼してゐる。

で、どいつも、こいつも、陰險な疑ぐり深い眼でお互に探り合つてゐるんだ。

あーア 斯した根性を捨て、……安心して仕事をし、散歩をし、飯を食ひ、そして眠つたならば、どんなに陽然と、氣持がよいことだらう。お互ひが人食ひ根性を捨て去ること、これこそ一切和合の基なのだ。

だが彼等は、父子、兄弟、夫婦、朋友、師弟或は仇敵さへもが、他の面識もない奴等と一味徒黨を結んで、或は互ひに勵まし努め 然も亦一方では互ひに牽制し合ひ、死すとも此の一線を踏み越えようとはしないのだ。

【十】

朝早く兄貴を尋ねた！兄貴は堂門の外に立つて空を見て居た、そこで僕はツト後ろに廻つて、手早く門を閉めた、そして特別に落着いて、又殊更穩かに話しかけに。

『兄さん僕は話があるんだ』

『話したらいゝだらう』と兄貴はゲルリと振りかへつて頷いた。
(45)

『僕は少し話があるんだが、然し充分言えないんだよ……』

註 (1)ピク／＼して―驚心吊胆。(2)陽然と―恬靜舒適。(3)勵―努力

；勸勉。(4)踏み越え―跨過。(5)空を見て―看天空。(6)手早く―敏

捷。(7)落着いて―安頓；沈靜；從容。(8)頷いた 點頭；首肯。

「ネ兄さん、野蕃時代の人は大抵皆少し人を食つたことが有るんだね、其後次第に考へ方が違つて來たもんだから、或る人達は決して人を食はなくなつたんだね……」

エ、……と即ち一方ではかうして好い方に心掛て人間に立ち返へり、それが又進んで一層立派な人間になつちやつたんだね、

だがね……然し兄さん、或る奴等の中にはまだ人間を食つてる奴が居るんだよ！

即ち心掛のいゝ奴は、始めはウジ、虫みたいなものから、だんく變つて來て、そこからズツト人間に進化して來たんだ、が然し一方、心掛の惡るい奴共は、向上しようといふ氣持

もなく、今に至る迄虫ケラの様を卑しむ可く、憎む可き生活を續けているんだよ、

かうして今もつて人を食ひ續けてゐる奴はネ、食はない人に比べてみたら何と愧しいことぢやないかと思んだ……。

人食ひ共が、眞直な人間に對する愧かしさは、恐らく虫ケラが猿に對して感ずる愧しさよりも、モット、深刻なものがあるだらうよ、易牙と言ふ男は自分の子を料理して桀紂に食はせた事がある、然しかうしたことは、實はもつと以前か

註 (1)考へ方―想法。(2)心掛て―留心；掛念。(3)立ち返へり―回返

。(4)ウジ虫みたい―蛆蟲一樣。(5)虫ケラー蟲子。(6)今もつて―到

了現在。(7)眞直―眞實。

らあつた事なんだよ。

だがかうした事が、天地開闢以來盤古より易牙に至る迄一
ズツと行はれてゐたといふことを誰が知らうよ。

斯うして食はれて來たものは易牙の子から徐錫林に至る迄
……そして徐錫林から又狼子村で捕はれた、ア、不幸な百姓
に至る迄、實に數知れぬ多くの人々がズツと食はれて來て
ゐるんだよ。

いやそればかりぢやない、去年城内で犯人を殺した時など
、或る癆病を患つてゐる奴がね、例の『血饅頭』を拾つて喰つ
たといふんだ。

とにかく奴等は僕を食ひたがつてゐるんだよ。だがね……

兄さん一人ぢやあ、まさか僕を食ふ方法も考へ出せなかつたらうと思ふんだ。

それなのに又どうして仲間なんぞに入つたんだい？

それとも人食ひ共はどんな事でも出来ると思つてゐるのか

ネ……

よしツ奴等が俺を食へようと言ふんなら、俺だつて奴等を食へることは出来るんだぞ。

だが奴等の仲間には共食ひする奴も居るだらうな？

だから皆よく／＼考へ直して早速にも改めたら、その時こ

註 (1)百姓―農人。(2)とにか(免に角)―總之。(3)考へ直して―改

念頭。

そ世の中は平和に立ち返るんだ。

今迄は縦令ひ、さうした不正を續けてゐたとしても、今後スツカリ心を入れ換えることの出来るものなら、俺は今日でも仲直りをしていゝと思ふんだよ、

それとも駄目だといふのかね……？

イヤ、兄さん——俺はチャンと知つてゐるんだ、兄さんが不承知だといふことをね……

オイさうだろう……兄貴は此間、小作人が減租に來た時も（駄目だ）と言つてた事があるからね……」

初めの間は、俺の話を聞ひて、兄貴は鼻の先で笑つてゐたが、次第に眼つきが凄くなつて來た。

最後に俺が、奴等の急所をピシリと言ひ當てると、兄貴の顔色がサツと變つた。

其の時丁度門の外に一塊りの連中が立つて見て居た、趙貴翁と、例の犬も、其の人混みの中に混つて居た。

俺が大聲で話してゐると、そいつ共はお互に警戒し乍らゾロ／＼と這入つて來た。

或る奴は見えない様に、布で顔を覆つてゐる様だつた。

又例の青猿野郎共は、口を笑らしてモヤ／＼と笑つてゐた。

註 (1) 入れ換える―交換；改。(2) 仲直り―和解。(3) 不承知―不答

應。(4) 鼻の先―鼻尖。(5) 急所―致命處；命門。(6) ピシリと―緊緊

的。(7) ズロ／＼―陸續；連貫。(8) 青猿野郎―惡棍。

俺は此の連中とはかね、顔見知りなんだが、こ奴等皆人間を食ふ奴等なんだ。

然し又俺は、此奴共の考へが夫々違つてゐるといふことも知つてゐるんだ、だがその中の或奴はかう考へてゐる。

今迄だつてズツト食つてたんだから、食つたつて何も構やしない、と斯う考へてゐる奴もある。又食つちやあいかん、といふことは知つてゐながら、それでゐてズル／＼に食ひ續けてゐる奴もあるんだ。

そこで奴等は外から、奴等の罪惡をピシヤリと、言ひ當てられることを非常に恐れてゐるんだ。

で奴等共は、俺が話す議論を傍で聞ひてゐるだが、腹五に据え

かねたものか、ウフフ……と苦笑した。

すると此の時、兄貴が突然凄い顔して大聲で呶鳴つた。

『皆出て行け……氣狂ひに用はあるまい』と、だが此の時、俺は又一つ奴等の巧みな手段を見抜いた。

といふのは改心どころか奴等はチャンと預め手配りをして……俺に氣狂ひの名目を覆せ様としてゐたんだ。

斯うしておいて、行く／＼は俺を食べ様といふんだ、全く以て安心どころの話ぢやない。

イヤ、どうかすると仲直りでもさせようとする奴が出て來

註

(1)かねぐ／＼一直從前。(2)顔見知りー認識面貌。(3)構やしな
ー不妨、不要緊。(4)ズル／＼にー狼籍。(5)腹に据えー忍氣。(6)見
抜いたー洞見、看透。(7)手配りー部署。

るかも知れんぞ。

いっぞや小作人共が話をしてゐた——例の悪る者を煮て食つた——といふ話もやつぱり丁度こんな術でやつたに違いないんだ。

これが、奴等の古い術なんだ。

○ ○ ○

陳老五がブン／＼怒つて這入つて來た。だがどうして俺の口を壓える事が出来るものか、

俺はどうしても、此奴等に言はねばならぬ、そこで俺は呶鳴つた。

『皆——改めたらいゝだらう、』

『改めろ——心の底から……』

人を食ふ様な奴は、先々此の世の中で、生きることを許る
されんといふことを、知らにあならんぞ……

若し君達が飽迄も改めんけれあ、結局君達自身も食ひ盡さ
れて了ふんだぞ……

よし生き残つてる奴がまだく有るとしても、結局は正し
い人に滅ぼされて了ふんだぞ……丁度狼が獵人に撃ち滅され
る様に……』

其處に集つてゐた野次馬共は、皆陳老五に追ひ出された。

註 (1)古の術—老法子。(2)ブン—憤憤的。(3)飽迄も—務必。(4)生
き残つて—殘存。(5)野次馬—闖入者。(6)追ひ出された—被驅逐。

兄貴も何處かへ行つて了つた。

陳老五は僕に勸めて家の中に入らせた。

部屋の中は眞暗闇だ、

梁と垂木が頭の上でユラ／＼揺れてゐる……暫らく揺れてゐるが、やがて大きな音を立て、俺の體の上に落ちて來た。

とても重くて、身動きも出來ない……

梁や垂木の奴め迄が……俺を壓し殺さうとしてゐる。

俺はこいつの重みは眞物ではないといふことを知つてゐるから、無理矢理に這ひ出した……體中マルデ汗ビツシヨリだつた。



だが俺は飽迄言はうと思ふんだ、

『皆は早速心を改めろ！心の底から改めろ——先々人を食ふ様な奴は、決して許るされないといふ事を心得て居れ……』と。

【十一】

太陽出でず………

門開かず………

唯是れ一日二回の飯のみ………か。

俺は箸を取り上げ、易者みたいに捏くつてみて、とう／＼

註

(1)ユラ／＼動搖貌。(2)音を立てて——發出聲音。(3)無理矢理に
——勉強。(4)這ひ出した——爬出。(5)ビツシヨ——濕透。(6)心得て——曉
得。覺悟。

思ひついた。

兄貴は俺達の妹が死んだワケをよく知つてゐるんだといふことを。

イヤ其の責任は全く兄貴に有ると言つていゝ。

さうだあの時は、俺の妹はヤツト、五歳になつたばかりだつたが……

その可愛いゝ、そして又いじらしい様子が今でもまだ俺の眼先にチラついてゐる。

あの時お母さんはヒタ泣きに泣いてゐらつした、

兄貴は御母さんに餘り泣かないで下さい、と言つて居た……

……

それは多分自分が食つてゐたからなんだらう……で餘りお母さんに泣かれちゃあ、流石に濟たまないといふ氣が起るからなんだらう！

だが、濟まないと思つて其れでいつたいどうしようといふんだ……。

妹は兄貴に食はれたんだが、御母さんは此のことを知つてるかしらん……。

俺だつてよくは知らないんだが……然し……

お母さんはこのことは知つてゐることは知つてゐたんだらう

註 (1)ヤットー纒。(2)いしらしいー可憐。(3)チラついてー明白可見

。(4)濟まないー過意不去。

!

勿論泣いて居た時、兄貴は妹を食つたなどといふことを、説明はしなかつたらうけれども、イヤ、甯ろ食はれることが當り前のことぐらひに思つてゐたかもしれない、といふ理は……僕が四五歳の時だつたかと思ふが、家の前で皆して涼んでゐた時、兄貴がこんなことを言つたのを覚えてゐる。

『兩親が病氣した時は、人の子たるものは須く一片の肉を割いて、之れをよく煮て、そして食はせてあげる可きた、其れでこそ始めて、立派な人間といふものだ』と言つてたことが有る。

其の時、傍で一緒に此の話を聞ひて居たお母さんは、別に

此の説に反對もしなかつた。

若し一片の肉を食べる位ひなら、全體だつて食べるワケだ

。

だが、それにしても、アノ時の妹の泣き様つたら、今思ひ出しても實に此の胸がえぐられる様だ。

かうして考へてくると實際何もかも不思議でならなくなる

【十二】

俺はもう何が何だか、理は分らなくなつてしまつた。

註 (1) 當り前—當然；應該。(2) 涼んで—乘涼。(3) 立派—堂堂。(4)

思ひ出して—回想。(5) えぐられる—被挖。

だが四千年以來、絶えず人を食つてゐた場所が、今日ヤツト分つたのだ。

實は俺も其の中に多年混つてゐたんだ……

妹が死んだのは、丁度兄貴が家の中を切り廻してゐた頃のことだつたから、兄貴は妹の肉を俺が食べる飯のお菜の中に混ぜたかも知れない。

イヤ、コツソリと俺に食はせたに違ひないんだ。

又俺としても、少しも氣付かずに、自分の妹の肉を幾切れか、もう食つたかも知れないんだ、……だがいよ／＼此度は俺が食はれる番が廻つて來たんだ。

俺も既に人を食つたからには、やはり、四千年といふ長い

人食ひの履歷を持つた、人食ひ共の中の一人なんだ。

俺だつて、始めは何も知らずに居たことなんだが……今ぢやあ、もう何もかもスツカリ分つてしまつた。

【十三】

だが然し、人を食つたことのない子供が……未だ居るかも知れぬ

救へ！その子供等を……。

(終り)

註 (1)切り廻して―管理。(2)コツツリと―祕密；暗地裏。(3)氣付が

ずに―想不到；不注意。(4)幾切れ―幾片。(5)番―當値；輪流到。

附錄

狂人日記

魯迅著

狂人日記

魯迅

某君昆仲，今隱其名，皆余昔日在中學校時良友；分隔多年，消息漸闕。日前偶聞其一大病；適歸故鄉，迂道往訪，則僅晤一人，言病者其弟也。勞君遠道來視，然已早愈，赴某地候補矣。因大笑，出示日記二冊，謂可見當日病狀，不妨獻諸舊友。持歸閱一過，知所患蓋「迫害狂」之類。語頗錯雜無倫次，又多荒唐之言；亦不著月日，惟墨色字體不一，知非一時所書。間亦有略具聯絡者，今撮錄一篇，以供醫家研究。記中語誤，一字不易；惟人名雖皆村人，不爲世間所知，無關大體，然亦悉易去。至於書名，則本人愈後所題，不復改也。七年四月二日識。

一

今天晚上，很好的月光。

我不見他，已是三十多年；今天見了，精神分外爽快。纔知道以前的三十多年，全是發昏；然而須十分小心。不然，那趙家的狗，何以看我兩眼呢？

我怕得有運。

二

今天全沒月光，我知道不妙。早上小心出門，趙貴翁的眼色便怪；似乎怕我，似乎想害我。還有七八個人，交頭接耳的議論我。又怕我着見。一路上的人，都是如此。其中最兇的一個人，張着嘴，對我笑了一笑；我便從頭直冷到腳跟，曉得他們布置，都已妥當了。

我可不怕，仍舊走我的路。前面一夥小孩子，也在那里議論我；眼色也同趙貴翁一樣，臉色也都鐵青。我想我同小孩子有什麼難，他也這樣。忍不住大聲說，『你告訴我！』他們可就跑了。

我想：我同趙貴翁有什麼難，同路上的人又有什麼難；只有廿年以前，把古久

先生的陳年流水簿子，蹣了一腳，古久先生很不高興。趙貴翁雖然不認識他，一定也聽到風聲，代抱不平；約定路上的人，同我作冤對。但是小孩子呢？那時候，他們還沒有出世，何以今天也睜着怪眼睛；似乎怕我，似乎想害我。這真教我怕，教我納罕而且傷心。

我明白了。這是他們娘老子教的！

三

晚上總是睡不着。凡事須得研究，纔會明白。

他們——也有給知縣打枷過的，也有給紳士掌過嘴的，也有衙役佔了他妻子的，也有老子娘被債主逼死的；他們那時候的臉色，全沒有昨天這麼怕，也沒有這麼兇。

最奇怪的是昨天街上的那個女人，打他兒子，嘴裏說道，「老子呀！我要咬你幾口纔出氣！」他眼睛却看着我。我出了一驚，遮掩不住；那青面擦牙的一夥人，

便都哄笑起來。陳老五趕上前，硬把我拖回家中去了。

拖我回家。家裏的人都裝作不認識我；他們的眼色，也全同別人一樣。進了書房，便反扣上門，宛然是關了一隻鷄鴨。這一件事，越教我猜不出底細。

前幾天，狼子村的佃戶來告荒，對我大哥說，他們村裏的一個大惡人，給大家打死了；幾個人便挖出他的心肝來，用油煎炒了喫，可以壯壯膽子。我插了一句嘴，佃戶和大哥便都看我幾眼。今天纔曉得他們的眼光，全同外邊的那夥人一模一樣。

想起來，我從頭上直冷到腳跟。

他們會喫人，就未必不會喫我。

你看那女人「咬你幾口」的話，和一夥青面擦牙人的笑，和前天佃戶的話，明明是暗號。我看出他話中全是毒，笑中全是刀，他們的牙齒，全是白厲厲的排着，這就是喫人的家伙。

照我自己想，雖然不是惡人，自從踹了古家的簞子，可就難說了。他們似乎別有心思，我全猜不出。況且他們一翻臉，便說人是惡人。我還記得大哥教我做論，無論怎樣好人，翻他幾句，他便打上幾個圈；原諒壞人幾句，他便說『翻天妙手，與衆不同。』我那里猜得到他們的心思，究竟怎樣；況且是要喫的時候。

凡事總須研究，纔會明白。古來時常喫人，我也還記得，可是不甚清楚。我翻開歷史一查，這歷史沒有年代，歪歪斜斜的每葉上都寫着『仁義道德』幾個字，我橫豎睡不着，仔細看了半夜，纔從字縫裏看出字來，滿本都寫着兩個字是『喫人』

書上寫着這許多字，佃戶說了這許多話，却都笑吟吟的睜着怪眼睛看我。

我也是人，他們要想喫我了！

四

早上，我靜坐了一會。陳老五送進飯來，一碗菜，一碗蒸魚；這魚的眼睛，白

而且硬，張着嘴，同那一夥想喫人的人一樣。喫了幾筷，滑溜溜的不知是魚是人，便把那他兜肚連腸的吐出。

我說：『老五，對大哥說；我悶得慌，想到園裏走走。』老五不答應，走了，停一會，可就來開了門。

我也不動，研究他們如何擺佈我；知道他們一定不會放鬆。果然！我大哥引了一個老頭子，慢慢走來；他滿眼兇光，怕我看出，只是低頭向着地；從眼鏡橫邊暗暗看我。大哥說，『今天你彷彿很好。』我說：『是的。』大哥說，『今天請何先生來，給你診一診。』我說：『可以！』其實我豈不知道這老頭子是劊子手扮的！無非借了看脈這名目，揣一揣肥瘠；因這功勞，也分一片肉喫。我也不怕，雖然不喫人，膽子卻比他們還壯。伸出兩個拳頭，看他如何下手。老頭子坐着，閉了眼睛，摸了好一會，呆了好一會；便張開他鬼眼睛說，『不要亂想。靜靜的養幾天，就好了』

不要亂想，靜靜的養！養肥了，他們是自然可以多喫；我有什麼好處，怎麼會『好了？』他們這羣人，又想喫人，又是鬼鬼祟祟，想法子遮掩，不敢直捷下手，真要令我笑死。我忍不住，便放聲大笑起來，十分快活。自己曉得這笑聲裏面，有的是義勇和正氣。老頭子和大哥，都失了色，被我這勇氣正氣鎮壓住了。

但是我有勇氣，他們便越想喫我，沾光一點這勇氣。老頭子跨出門，走不多遠，便低聲對大哥說道，『趕緊喫罷！』大哥點點頭。原來也有你！這一件大發見，雖似意外，也在意中；合夥喫我的人，便是我的哥哥！

喫人的是我哥哥！

我是喫人的人的兄弟！

我自己被人喫了，可仍然是喫人的人的兄弟！

五

這幾天是退一步想：假使那老頭子不是劊子手扮的，真是醫生，也仍然是喫人

的人。他們的祖師李時珍做的『本草什麼』上，明明寫着人肉可以煎喫；他還能說自己不喫人麼？

至於我家大哥，也毫不冤枉他。他對我講書的時候，親口說過可以『易子而食』；又一回偶然議論起一個不好的人，他便說不但該殺，還當『食肉寢皮。』我那時年紀還小，心跳了好半天。前天狼子村佃戶來說喫心肝的事，他也毫不奇怪，不住的點頭。可見心思是同從前一樣狠。既然可以『易子而食』，便什麼都易得，什麼人都喫得。我從前單聽他講道理，也胡塗過去；現在曉得他講道理的時候，不但唇邊還抹着人油，而且心裏滿裝着喫人的意思。

六

黑漆漆的。不知是日是夜，趙家的狗又叫起來了。

獅子似的凶心，兔子的怯弱，狐狸的狡猾。……

七

我曉得他們的方法，直捷殺了，是不肯的，而且也不敢，怕有禍祟。所以他們大家連絡，布滿了羅網，逼我自戕。試看前幾天街上男女的樣子，和這幾天我大哥的作爲，便足可悟出八九分了。最好是解下腰帶，掛在梁上，自己緊緊勒死；他們沒有殺人的罪名，又償了心願，自然都歡天喜地的發出一種嗚咽咽的笑聲。否則驚嚇發愁死了，雖則略瘦，也還可以首肯幾下。

他們是只會喫死肉的！——記得什麼書上說，有一種東西，叫『海乙那』的，眼光和樣子都很難看：時常喫死肉，連極大的骨頭，都細細嚼爛，嚙下肚子去，想起來也教人害怕。『海乙那』是狼的親眷，狼是狗的老家。前天趙家的狗，看我幾眼，可見他也同謀，早已接洽，老頭子眼看着地，豈能瞞得我過。

最可憐的是我的大哥，他也是人，何以毫不害怕；而且合夥喫我呢？還是歷來慣了，不以爲非呢？還是喪了良心，明知故犯呢？

我詛咒喫人的人，先從他起頭，要勸轉喫人的人，也先從他下手。

其實這種道理，到了現在，他們也該早已懂得，……

忽然來了一個人；年紀不過二十左右，相貌是不很看得清楚，滿面笑容，對了我點頭，他的笑也不像真笑。我便問他，「喫人的事 對麼？」他仍然笑着說，「不是荒年，怎麼會喫人。」我立刻就曉得，他也是一夥，喜歡喫人的；便自勇氣百倍，偏要問他。

「對麼？」

「這等事問他甚麼。你真會……說笑話……今天天氣很好。」

天氣是好，月色也很亮了。可是我要問你，「對麼？」

他不以為然了。含含糊糊的答道，「不……」

「不對？他們何以竟喫？！」

「沒有的事……」

『沒有的事？狼子村的喫；還有書上都寫着，通紅斬新！』

他便變了臉；鐵一般青。睜着眼說，『也許有的，這是從來如此……』

『從來如此，便對麼？』

『我不同你講這些道理；總之你不該說，你說便是你錯！』

我直跳起來；張開眼，這人便不見了。全身出了一大片汗。他的年紀，比我大
哥小得遠，居然也是一夥；這一定是他娘老子先教的。還怕已經教給他兒子了；所
以連小孩子，也都惡狠狠的看我。

九

自己想喫人，又怕被別人喫了，都用着疑心極深的眼光，面面相覷。……

去了這心思，放心做事走路喫飯睡覺，何等舒服。這只是一條門檻，一個關頭
。他們可是父子兄弟夫婦朋友師生仇敵和各不相識的人，都結成一夥，互相勸勉
互相牽掣，死也不肯跨過這一步。

大清早，去尋我大哥；他立在堂門外看天，我便走到他背後，攔住門，格外沈靜，格外和氣的對他說：

『大哥，我有話告訴你。』

『你說就是，』他趕緊回過臉來，點點頭。

『我只有幾句話，可是說不出來。大哥，大約當初野蠻的人，都喫過一點人。後來因爲心思不同，有的不喫人了，一味要好，便變了人，變了真的人。有的卻還喫，——也同蟲子一樣，有的變了魚鳥猴子，一直變到人。有的不要好，至今還是蟲子。這喫人的人比不喫人的人，何等慚愧。怕比蟲子的慚愧猴子，還差得很遠很遠。』

『易牙蒸了他兒子，給桀紂喫，還是一直從前的事。誰曉得從盤古開闢天地以後，一直喫到易牙的兒子；從易牙的兒子，一直喫到徐錫林；從徐錫林，又一直喫』

到狼子村捉住的人。去年城裏殺了犯人。還有個生癆病的人，用饅頭蘸血舐。

「他們要喫我，你一個人，原也無法可想；然而又何必去入夥。喫人的人，什麼事做不出；他們會喫我，也會喫你，一夥裏面，也會自喫。但只要轉一步，只要立刻改了，也就人人太平。雖然從來如此，我們今天也可以格外要好，說是不能！大哥，我相信你能說，前天佃戶要減租，你說過不能。」

當初，他還只是冷笑，隨後眼光便凶狠起來，一到說破他們的隱情，那就滿臉都變成青色了。大門外立着一夥人，趙貴翁和他的狗，也在裏面，都探頭探腦的挨進來。有的是看不出面貌，似乎用布蒙着；有的是仍舊青面獠牙，抿着嘴笑，我認識他們是一夥，都是喫人的人。可是也曉得他們心思很不一樣，一種是以爲從來如此，應該喫的；一種是知道不該喫，可是仍然要喫，又怕別人說破他，所以聽了我的話，越發氣憤不過，可是抵着嘴冷笑。

這時候，大哥也忽然顯出凶相，高聲喝道：

『都出去！瘋子有什麼好看！』

這時候，我又懂得一件他們的巧妙了。他們豈但不肯改，而且早已佈置；豫備下一個瘋子的名目罩上我。將來喫了，不但太平無事，怕還會有人見情。佃戶說的大家喫了一個惡人，正是這方法。這是他們的老譜！

陳老五也氣憤憤的直走進來。如何按得住我的口，我偏要對這夥人說：

『你們可以改了，從真心改起！要曉得將來容不得喫人的人，活在世上。』

『你們要不改，自己也會喫盡。即使生得多，也會給真的人除滅了。同獵人打
完瘋子一樣——！同蟲子一樣！』

那一夥人，都被陳老五趕走了。大哥也不知那里去了。陳老五勸我回屋子裏去。裏面全是黑沈沈的。橫梁和椽子都在頭上發抖；抖了一會，就大起來，堆在我身上。

萬分沈重，動彈不得；他的意思是要我死。我曉得他的沈重是假的，便掙扎出

來，出了一身汗。可是偏要說：

『你們立刻改了，從真心改起！你們要曉得將來是容不得喫人的人……』

十一

太陽也不出，門也不開，日日是兩頓飯。

我捏起筷子，便想起我大哥；曉得妹子死掉的緣故，也全在他。那時我妹子纔五歲，可愛可憐的樣子，還在眼前。母親哭個不住，他却勸母親不要哭；大約因為自己喫了，哭起來不免有點過意不去。如果還能過意不去，……

妹子是被大哥喫了，母親知道沒有，我可不得而知。

母親想也知道；不過哭的時候，却並沒有說明，大約也以為應當的了。記得我四五歲時，坐在堂前乘涼，大哥說爺娘生病，做兒子的須割下一片肉來，煮熟了請他喫，纔算好人；母親也沒有說不行。一片肉喫得，整個的自然也喫得。但是那天的喫法，現在想起來，實在還教人傷心，這真是奇極的事！

十二

不能想了。

四千年來時時喫人的地方，今天纔明白，我也在其中混了多年；大哥正管着家務，妹子恰恰死了，他未必不和在飯菜裏，暗暗給我們喫。

我未必無意之中，不喫了我妹子的幾片肉，現在也輪到我自己，……
有了四千年喫人履歷的我，當初雖然不知道，現在明白？難見真的人！

十三

沒有喫過人的孩子，或者還有？

救救孩子……

一九一八年四月。

上海中學生書局

地址——上海四馬路五五二號（中華書局西首）

中學生叢書		中學生辭典		中學生創作叢書	
中學生叢書指導(上)	50	中學生百科辭典	1.20	共出廿冊	每冊三角
中學生叢書指導(下)	.50	中學生文學辭典	1.40	一、雲霓	十一、燈光
中學生作文指導	.50	中學生人名辭典	1.40	二、追求	十二、塞外
中學生反日指導	.40	中學生文學讀本		三、微笑	十三、月夜
中學生婚姻指導	.40	一、散文集	1.00	四、湖邊	十四、故鄉
中學生問題	.50	二、應用文集	1.00	五、弱者	十五、林中
中學生文學	.40	三、小品文集	1.00	六、心痕	十六、榮歸
中學生日記	.40	四、創作小說集	1.00	七、失祭	十七、母親
中學生遊記	.40	五、翻譯小說集	1.00	八、回家	十八、野宴
中學生生活	.40	六、詩歌戲曲集	1.00	九、往事	十九、密約
中學生書信	.50	中學生文學叢書		十、雨天	二十、血跡
中學生創作(上集)	.60	她的肖像	1.40	日文新書	
中學生創作(中集)	.60	中國民歌千首	1.20	標準日華辭典	2.30
中學生創作(下集)	.60	女兒	.60	日語漢譯辭典	2.00
中學生翻譯	.60	矛盾(分黃本)	.40	速成日語讀本	.70
中學生小說作法	.40	中學生生活素描	.30	速成日語文法	.70
中學生小說(長篇)	.60	中學生學術叢書		速成日語會話	.70
中學生小說(短篇)	.60	社會科學概論	.20	速成日語用例	.70
中學生戲劇	.40	倫理學綱要	.50	其他新書	
中學生童話	.40	社會學綱要	.50	文藝園地	1.00
中學生音樂	.40	中國社會思想史	.30	愛的文庫	1.20
中學生詩歌	.40	中國資本主義史	.30	初夜的知識	.60
中學生演說	.40	資本主義批判	.30	戀歌與情詩	.60
中學生談話	.40	社會思想概論	.30	夫婦愛的創造	.40
中學生小品	.40	新哲學概論	.30	女學生結婚指導	.40
中學生隨筆	.40	新作文法	.50	女學生戀愛故事	.70
中學生中國史	.50	讀書法入門	.15	女學生小說	.40
中學生世界史	.50				
中學生文學家	.50				
中學生思想家	.50				

(本書局詳細書目，函索即寄)

中華民國廿二年一月付印
中華民國廿二年二月出版

譯文
狂人日記

每冊實價四角

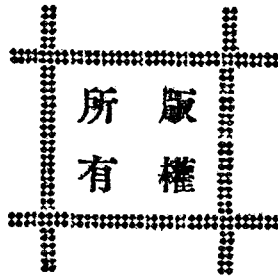
註釋者 日語研究社

發行人 高 堦 書
上海四馬路五五二號

印刷者 協新印刷公司
上海麥根路及發角
七三五弄第三十號

發行所 開華書局
上海四馬路中市

總經售者 中學書局
上海四馬路中市



全國經售處

廈門 新文 民書 社	汕頭 文明 商務 書局	廣州 共和 書局	太原 晉新 報社	西安 派報 社	開封 西文 書莊	北平 佩文 齋書 莊	天津 佩文 齋書 莊	濟南 東方 書莊	青島 中華 書局	南京 花牌 樓書 局	武昌 太平 洋書 局	長沙 民智 書局	成都 北新 書局	重慶 平民 書店	杭州 開明 書店	南昌 文明 書店	南甯 強華 書局	雲南 世界 書局	上海 開明 書局	全國 各大 書局
---------------------	----------------------	----------------	----------------	---------------	----------------	---------------------	---------------------	----------------	----------------	---------------------	---------------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------	----------------

